

対話を通して学びを深める授業づくり

—国語科における文学教材を中心として—

M16EP004

齋藤 知美

1. 問題と目的

次期学習指導要領の改訂の目玉になっているアクティブラーニングの視点として「主体的・対話的・深い学び」とあり、学習過程の質的改善が求められている。しかし、今までの経験から、国語科の授業、特に文学教材の読み取りの授業において、教師の頭の中にある一つの正解に向かって教師と一部の発言が得意な児童によって進んでいく授業が多くみられる。つまり、このような授業において、発言をしなかった児童は、教師と発言した児童のやり取りを聞いて授業が終わってしまう。

文学教材は、一人でも読める。しかし、学習材に対する自分の考え（読み）を友達に伝え、友達と対話をすることによって、他者の視点を取り入れ、自分の考えを見直し、学びを深めていくことができるのではないかと考えた。

ここでいう「対話」とは、多田（2006）が、「語り合いによって何かを生み出すことを目的とした対話では、伝えるものを明確に伝え、相手の伝えたいことを的確に把握することが必要である。」と述べているが、この考えを参考にして、「他者と自分との間において新たな発見、意味の共有をすることを目的として、相手の伝えたいこと（情報・意味）を的確に聞き取り、自分の思いや考えと突き合わせて相手に返すことを繰り返していくこと」であると捉えている。

学びを深めていく方法として、対話を取り入れた理由は、まず、一人一人の子どもが自分なりの既有的知識や体験をもとに【学習材との対話】をして、次に【他者との対話】をすることによって、他者によるズレに揺さぶ

られ、その結果、子どもの中で、自分一人で学習材と出会った時に捉えることができなかった新しい知見に出会い、更に、それらの知見から、もう一度自分の考えを振り返って（フィードバック）【自己との対話】を行い、自分の考えを再構築していくことができるからである。このような学習過程から学びを深めていくことができる。

「学びを深める」とは、子どもの学びが、他者の様々な考え方に触れることで広がり、他者の考えと自分の考えを比べ、自分の考えが明確になったり、自分の考えが変容（向上的変容）したり、自分一人では持ち得なかった新しい観点を得たりすることである。ここでいう「学び」とは、鶴田・河野（2012）が言うように、「子ども一人ひとりが内側で構成する個性的で個別的な『意味の経験』」のことであり、ここでいう「意味」とは、「言葉の意味（語義）ではなく、人それぞれによつてのとらえ方」としている。

本研究の目的は、まず「話す・聞く」を中心に児童の実態把握を行い、次に対話する力を高めていくための取り組みを行い、そして、それらを踏まえ、授業において子どもが対話により学びを深めていくための具体的な方法を探ることである。そして更に、その具体的な方法を使って授業実践を行い、児童の対話の様子や学びの深まりを検討していく。

2. 方法

- (1) 対象校 山梨県内の公立小学校
- (2) 期間 平成28年5月～12月(週1回)
- (3) 対象児童 第6学年児童(29名)

(4) 実施方法

①参与観察，アンケートによる実態把握

週1回の授業参与観察，アンケートによって児童の実態把握を行い，効果的な取り組みや方法を明らかにしていく。

②対話する力を高めるための取り組み

「対話を成立させるために必要なこと」を踏まえ，まず対話を取り入れた授業をする前段階として，「対話」する力を高めていくための取り組みを行う。

③授業実践

①②を踏まえて，具体的な方法を考え，授業実践を行い，児童の対話の様子や学びの深まりを検討していく。

3. 結果と考察

(1) 参与観察，アンケートによる実態把握について

授業の参与観察において，授業中，自ら進んで発言することは少ないものの，教師の発問に対して，自分の考えをつぶやいたり，指名されると自分の考えを話したりすることができる子どもが多く見受けられた。また，朝の会のスピーチにおいては，学級の半数の子どもが，自分の話したいことを順序良く話すことができる。班の話し合いの場面では，自分の考えが持てないまま話し合いに入っている子どもが多く，そのため一人一人の学びが深まっていないこともあった。また，話すことに積極的な子と消極的な子がいるため，一部の児童で話し合いが進められていたこともあった。しかし，必要性の強く感じる話題についての話し合い（討論会）において，一人一人に役割が与えられていると，活発に意見がやり取りされることを見取ることができた。

そこで，一学期に国語の授業においての「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」について児童自身がどのように認識しているのかを把握するために，アンケート調査を実施し

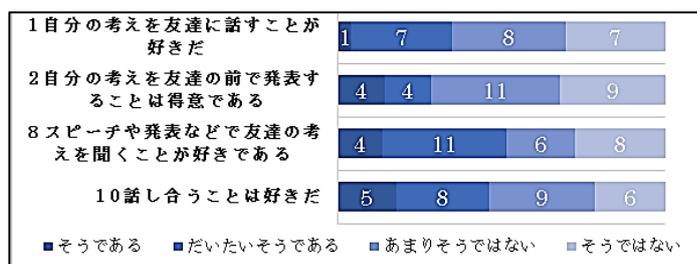


図1 「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」のアンケート結果（実習校6年生28名が回答）

た。調査項目のうちいくつかを図1で取り上げた。

アンケート結果から，話し合うことや友達の考えを聞くことは嫌いではないが，1と2の項目に「あまりそうではない」「そうではない」と答えた児童の割合が高いことから，自分の考えを友達に話すことはあまり好きではないことが伺える。そのように答えた児童の数名に理由を聞いてみると，「自分の考えが持てない」「何を発言したらよいかわからない」「恥ずかしい」と言っている。「自分の考えが持てない」「何を発言したらよいかわからない」といった学力的な要素や，「恥ずかしい」といった人前で自分の考えを進んで披露することに消極的になる思春期の特性から，自分から発言をしない児童が多いという実態があることが明らかになった。

以上のことから，「学力的な要素」や「思春期の特性」から，話すことに苦手意識を持つ児童が多いが，話す「場」や「役割」を与えたり，必要性を強く感じる話題を与えたりするといった工夫をすると，意欲的に意見をやり取りできるのではないかと考えた。

(2) 対話する力を高めていくための取り組みについて

授業参与観察とアンケートによる児童の実態を基に，まず対話による授業をする前段階として，多田（2006，2012），村松（2011）が述べている以下の「対話を成立させるために必要なこと」を参考にして，対話する力を高めていくための取り組みを行った。

- ①対話の基盤づくりをする。
 ア、温かな人間関係づくり
 イ、声に出すトレーニング
 ウ、言いたいことをまとめるトレーニング
- ②対話の技能を習得させる。
 ア、聞く力（まず相手を受け入れる）
 イ、応じる力（相手に詳しく質問する）
 ウ、話す力（質問に対して詳しく答える）
 エ、話を進める力（話し合いをつなげ展開させる）
- ③話すことへの不安や苦手意識を持つ子どもも話しやすい雰囲気づくり・場づくりをする。
 ア、話すことへの不安を和らげる教師の言葉がけ
 イ、安心して語れる「場」の設定
 ウ、物的環境設定（机の配置・グループの人数等）
 エ、全員が当事者意識を持ち、主体的に参加できるシステムづくり

今年度は②③ができるようになることを目指し、特別活動として、「他己紹介をしよう！」（6月）、「ブレインストーミングをしよう！」（7月）、「対話を学ぶ」（10月）の3つの取り組みを行った。そのうち1つの取り組み「対話を学ぶ」の実践を紹介する。（表1）

表1 「対話を学ぶ」取り組み

題材名 「対話」を学ぶ <2016, 10, 18実施>
ねらい ・「対話」とは何か、また対話の必要性を知る。 ・今までに行った「他己紹介」や「ブレインストーミング」を振り返りながら、 <u>対話の4つのポイント（受け止める・詳しく質問する・詳しく答える・話を進める）を理解する。</u> （②の技能の習得） ・対話の4つのポイントを意識して、友達と対話する。
成果 授業の始めにアイスブレイクとして行った「心のキャッチボール」（構成的グループエンカウンター）において、想像していた以上に子どもが良い気づきをしてくれた。例えば、一回目の無言で30秒間のキャッチボールでは、「無言で寂しかった」「何も思わなかった」「怖い」、二回目の相手にひとこと言ってキャッチボールでは「時間がたつのが早かった」「会話が弾んで楽しかった」「友達の趣味を知れた」などであった。この活動が、本授業の「対話」を学ぶ授業に繋げることができたことが伺える。また、キャッチボールをす

ることが、心情面の気づき（相手への配慮、思いやり等）を促し、対話にとって必要なことが学ぶことができた。更に生き生きと対話する子どもの様子が見受けられたことが、参観してくださった先生方の感想に書かれていた。

課題対話の4つのポイントの中で一番大切だと思われる「受け止める」とはどのようなことなのかをしっかりと押さえることができていなかったため、授業実践に入る前に「受け止める」とは、「賛成する」ことでも「納得する」ことでもなく、相手の気持ち（意味）が分からないからとりあえず「受け止める」ということであることをしっかりと押さえたい。

（3）授業実践：対話により学びを深めていくための具体的な方法とその成果

児童の実態や対話する力を高めていくための取り組みの中で学んだことから、対話により学びを深めていくための4つの具体的な方法を考え、授業実践を行った。

***単元名：**作品の世界を深く読み味わおう～対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりする力～

***教材名：**「やまなし」（物語）宮沢賢治
 「イーハトーブの夢」（伝記）畑山博（光村図書6年）

*単元計画の概要（全9時間）：

「対話授業の基本過程」（後述）は、1時間の授業の中で構成される場合も、授業をまたいで行われる場合もあった。（表2）

表2 単元計画の概要

時	主な学習活動
1	①「やまなし」の範読を聞いて、初発の感想を持つ。 ②この作品に「題名」をつける。また、その根拠や理由も考える。（学習前、作品から一番強く受けたメッセージ）
2	③ ①で書いた感想をもとに、学習計画を立てる。 ④ ②で書いた作品の「題名」とその「根拠」と「理由」について、友達と対話する。
3	⑤「イーハトーブの夢」を読み、宮沢賢治の考え方生き方、書いた作品について知る。 ・宮沢賢治の考え方生き方についての自分の考えを書き、対話する。
4	⑥「五月」の作品の設定を確認し、叙述を読みながら、登場する者と物の位置関係を捉え、「五月の幻灯」を完成させる。

	配置するしかけ ⑦「クラムボン」の正体は何かについて考える。また、その根拠や理由も考える。
5	⑧「クラムボン」の正体は何かについて、また、その根拠や理由について対話する。 ⑨「十二月」の作品の設定を確認し、叙述を読みながら登場する者と物の位置関係を捉え、「十二月の幻灯」を完成させる。 配置するしかけ ※「ラムネのピン」は、あるのかないのかについても考え、対話する。
6	⑩「五月」の場面の「谷川の情景」や「カニの親子の様子」「出来事」を比喻表現や擬声語・擬態語（キーワード）に着目して、場面の中の様子の変化を読み取る。置き換えるしかけ ⑪「かわせみ」がしたことは、悪いことか考え、対話する。
7	⑫「十二月」の場面の「谷川の情景」や「カニの親子の様子」「出来事」を比喻表現や擬声語・擬態語（キーワード）に着目して、場面の様子の変化を読み取る。置き換えるしかけ ⑬「やまなし」は、かにかから見ると生のイメージか死のイメージかについて考え、対話する。
8	⑭「五月」と「十二月」の幻灯を比べ、対比されているものは何か考える。 ・「五月」と「十二月」の図を掲示し、対比表を使って、「五月」と「十二月」の幻灯を対比させる。
9	⑮作者はどんなことを伝えたくて（主題）、「やまなし」という題名を付けたのか考え、対話する。 ⑯今日考えた作品の主題また、これまでの学習してきたことを生かして、この作品に「題名」をつけ、その理由も書く。（学習後、作品から一番強く受けたメッセージ）

①「対話」により学びを深めていくための具体的な方法

ア、対話授業の基本過程の設定

子どもの学びが広がり深まる

課題把握—対話する課題を確認する。
学習材との対話と自己との対話—課題に基づき、作品と対話し、自分の考えを持つ。
ペア・グループによる対話—自分の考えを他者（友達）と交流する。
全体対話—自分の考えをクラス全員と交流する。
個のまとめ（自己との対話）—振り返りを行い、自分の考えを再構築してまとめる。

「ペア・グループによる対話」は、それぞれの長所や短所を考慮し、「課題」や「場」にふさわしい方を選んだ。ワークシート(後述)の流れにも沿っているので、子どもは、次に何をするのか見通しを持って取り組んでいた。

イ、対話を生み出す主発問の工夫・しかけの設定

まず1つ目は、子どもが対話をする必要性を感じることができ、また対話をしたくなるような主発問を工夫した。対話をしたくなる時は、まさに自分と友達との考えの「ズレ」が生じ、「友達はどんな考えを持ったのだろう」と、他者の考えを知りたくなる時であると考えた。まず、初めて学習材「やまなし」に出会った子どもに、初発の感想を書いてもらった。子どもが書いた初発の感想を拾い上げ、主発問へつないでいくことによって、子どもが「その疑問を解決したい」「知りたい」と必要性を感じるようにした。更に、作品から受けるメッセージの変容から読みの深まりを見取るために、学習前後に、「自分だったらこの作品にどんな題名をつけるか」という主発問を用意したり、7の主発問を解決するために、4・5・6の主発問を用意したりした。このように、子どもが次の自分の学びに生かせるように、なるべく発問に繋がりをを持たせるようにした。教師が事前に用意した主発問は、以下の通りである。（表3）

表3 主発問表

1	「やまなし」を聞いて、面白いと思ったところ、疑問に思ったところ、意味の分からない言葉、いいな、綺麗だなと思ったことを、自由につぶやいてみよう。（初発の感想）
2	自分だったら、この作品にどんな題名をつけますか。またその「根拠」や「理由」を考えてみよう。
3	「クラムボン」とは、どんなものか考えてみよう。
4	「かわせみ」がしたことは、悪いことか考えてみよう。
5	「やまなし」はかにかから見ると、「生」のイメージか「死」のイメージか考えてみよう。
6	「やまなし」で対比されているものは何か考えてみよう。

7	作者は、どんなことを伝えたかったのかを（主題）考えてみよう。
8	これまでの学習を通して、この作品にどんな「題名」をつけますか。またその「根拠」や「理由」を考えてみよう。

2の主発問に取り組んだ後の子どもの感想に「友達の考えが聞けて良かった。もっと他の人も聞いてみたい。」「自分の考えに友達の考えが生かされた。」とあり、対話をする意欲を高める主発問になっていたことが伺えた。

2つ目は、「しかけ」の設定である。子どもが対話したくなるためには、授業の中に「しかけ」を設定する必要があると考えた。具体的には、「五月」「十二月」の登場人物の位置関係を捉えるために、登場人物の挿絵を操作して、「五月の幻灯」「十二月の幻灯」を完成させる「配置するしかけ」、また、センテンスカードを用いて、その中に書かれている言葉の間違えを見つけ、その間違いの理由についての「問い返し」をすることで、指導内容を押さえていくといった「置き換えるしかけ」をした。「しかけ」をすることで、一人一人が自分の考えを持ち、グループ対話の中で主発問を解決しようとする意欲が高まり、対話も活発になっていた。

ウ、対話をつなげるための教師の働きかけ

1つ目は、教師の言葉がけの工夫である。まず、子どもが安心して語れるように、子どもどのような発言も肯定的に受け止めることに心掛けた。また、全体対話の中で、子どもの意見に対して、「揺さぶり」を加えながら焦点化するような言葉がけ、自分の考えを明確にするような、または文脈のどこに位置づかを確認するような「問い返し」の言葉がけをして子どもの対話を促進していった。例えば、「本当にそうなの？」「もう少し詳しく説明してごらん。」「どこからそう思ったの？」などの言葉がけを臨機応変に行った。例えば第5時において教師が「ラムネのビンはどこ

にあったの？」と揺さぶりの言葉がけをすると、その後のグループ対話が盛り上がっていた。

2つ目は、机間巡視による子どもの観察である。クラス全体での対話がうまく繋がり学びを深めていけるために机間巡視の中で子どもの個々の意見を把握しておき、全体対話を促進させるようにした。しかし、話すことに苦手意識を持つ子どもは、自分の考えを発表するだけで精一杯で、なかなか対話に繋がりを持たせることが難しかった。また、机間巡視をして、決められた活動がきちんと行われているか観察し、必要に応じて支援をしていくことで、スムーズに活動を進めることができた。

エ、対話を支えるための手立て

1つ目は、ワークシートの工夫である。自分の考えをまとめ、友達との対話をするための手立てとした。結果、どのように学びが深まったのかを探る手立てともなった。このワークシートを使うことにより、書いたことを基に、友達と対話することができた。また、友達と対話したときに書いたメモを見ながら、最後のまとめに生かすことができていた。

2つ目は、自分の考えが持てない児童への支援である。今までの体験の中から結びつけて考えさせたり、問われていることの内容をかみ砕いて説明したりすることによって、自分の考えを持てるようにした。以後、自信をもって意見を書くことができるようになり、積極的に友達と対話したり、全体対話で発表したりする姿が見られた。

3つ目は、対話の仕方の提示である。「対話してごらん」というだけでは、どのように対話してよいか戸惑う児童もいるので、話型を示して対話を促していく方法を取った。その結果、話すことが苦手な子どもも、この「対話の仕方」にそって、生き生きと対話をする姿が見られた。

いつもはワークシートに記述することに消極的な R 児であるが、「まとめ」の部分において、友達との対話で得た A さんの考えの良さに気付き、自分の始めの題名を再構成して新しい題名を考えることができていた。

M 児 アンケートの「自分の考えを友達に話すことが好き」という項目に「**そうである**」と答えている。授業中の様子は、**内容理解**はとても速く、教師の発問に対するつぶやきが**多く**、話し合いでの発言も**積極的**である。

プロトコルより一部抜粋

★ペア対話の様子（第7時：「やまなし」はカニから見て、「生」のイメージか「死」のイメージか、という主発問に対して、の友達と対話している様子）

M：どっちにした？

S：死

M：なんでそう思った？

S：（やまなしは）しゃべらないし、つぶれるから

M：かになにとって死のイメージがそれ？

S：かになから見て（やまなしは）しゃべらないから、

M：あーかになから見たら、（やまなしは）しゃべらないから、基本的に死のイメージってことね。

プロトコルより、ペアの対話においては、相手に理由を詳しく聞いている姿が見られた。また、グループ対話では、友達に質問をするように促したり、M 児も相手に質問をしたり、意見をいったりして、対話をリードしていた。授業態度も教師の問いかけにつぶやいたり、発問に対して楽しみながら考えたりする姿が見られた。M 児の学びの深まりをワークシートの記述から考察する。（図 3）

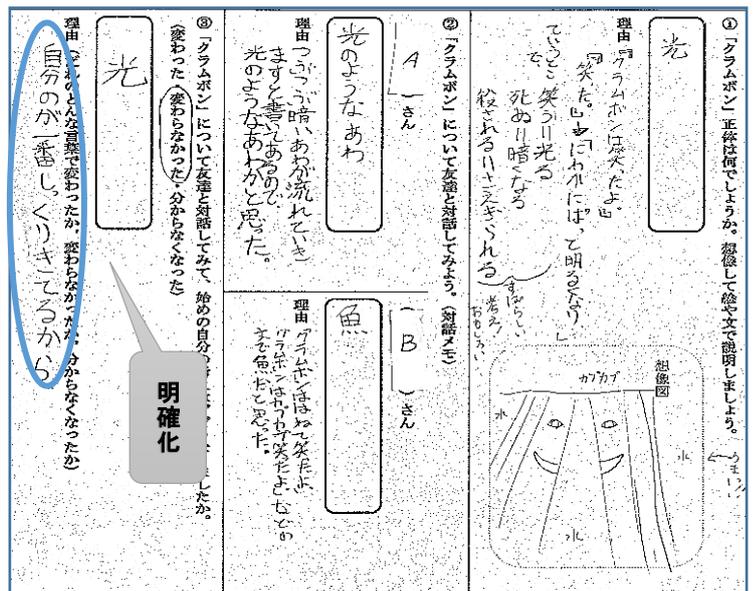


図 3 M 児のワークシートの記述

友達と対話することによって、自分の考えを更に明確化できていた。

③学びの深まりについて

ここまで述べてきた授業実践における学びの深まりを、読みの深まりという視点から検討する。子どもが作品を深く読み取ることができたかということ、初回と最終回の授業において「この作品にどんな題名をつけますか。」という同一発問に対する答えの変容から見取った。初回と最終回でつけた題名とその理由を比較し、これまでに学んだことが活かされていたり、作者の伝えなかったこと（主題）を意識した題名と理由になっていたりしたら、読みは深まったと考えた。今回の授業において、筆者がねらっていた読みの深まりは、「自然界の生と死の循環（命のつながり、命の大切さ）」を読み取ることであったが、「理想」や「人生観」など予想以上の読み取りができていた子もいた。（表 4）

表 4 読みの深まりの例

I 児 「自然界の生と死の循環」と読み取った例	
初回	「黄金」→水の底で見える光は、黄金色に見えると思ったから。

最終回	「生きる大切さ」→生き物たちは、食物連鎖でつながっていると伝えたかったと思う。「生」と「死」のことが書いてあって、中でも宮沢賢治は、「生」を大事にしていたから。
K児 「作者の理想」と読み取った例	
初回	「青い天井」→全て青い天井の下で起こっていることだから「天井」という言葉が数多くあったから。
最終回	「自然の光」→宮沢賢治は、十二月の世界が理想。つまり、自然が光り輝く世界を望んでいる。
M児 「人生観」と読み取った例	
初回	「光の輝き」→この「やまなし」を読んで、光とか輝きが表現されていたので、この題名にしました。
最終回	「苦しい時もあれば嬉しい時もある」→この「やまなし」を読んで、五月は大変苦しいけど、十二月は嬉しかったから。

④対話を取り入れた授業に関する子どもの意識

授業後にアンケートを行い、「対話を取り入れた授業をする中で、良かったこと、難しかったこと」を聞いた。子どもが答えてくれたことのいくつかを示す。(表5)

表5 対話を取り入れた授業の良かったこと、難しかったこと

良かったこと	自分の考えが持てた、友達のを自分の考えに取り入れられた、意見が言えるようになった、自分の意見を発言して友達の考えを聞いて世界が広がった、あまりしゃべらない人としゃべれた、最初とは違う題名ができて考えが深まった、友達の意見を聞くことで自分の考えを再確認できたり新しい考えが生まれたりした、みんなの考えが載っているプリントを配られて興味を持てた
難しかったこと	自分の考えを出す、自分の考えや気持ちを言葉や文章にして表現する、友達に自分の意見を伝える、一対一対話し続ける、意見がかみ合わない、

「良かったこと」から、他者との対話によって様々な知見に出会い、そこで得た知見をまとめにおいて再構築して新しい考えを生み出したり、自分の考えを再確認(明確化)させたりして、学びを深められたことが感じられた。また「難しかったこと」から、これまで「話す」「聞く」を重点的に取り組んできたが、自分の考えを書いてまとめることにも取

り組んでいく必要もあることに気付いた。

4, 全体考察

本研究において、児童の実態を基に対話する力を高める取り組みと、対話により学びを深めるための4つの具体的な方法を考え、授業実践を行ってきた。

対話する力を高める取り組みでは、対話に必要なとされる技術の習得と、話しやすい雰囲気づくり・場づくりをすることができた。

国語科の授業実践においては、4つの具体的な方法を使うことにより、子どもの学びを広げ深めることは、ある程度できたのではないかと考える。つまり、対話により「情報」のやり取りをして、子どもの個々の考えを広げることができた。しかし、友達がどのようなつもり(意味)で言っているのかということ聞き取ることは、不十分だったと思う。

国語科の読み取りの授業において、教師から言われたことを(情報)を知るだけでは、「分かったつもり」で終わってしまう。しかし、学習の過程の中で他者と対話し、他者からの意味を問うような質問をされ、それに対して答えていくことにより学びが深まり、自分なりの解釈が出来上がって、「本当の分かった」になるのではないかと思った。

このことから、相手がどうしてそう考えたのかといった「意味」を問うような質問をし合えるより深い対話を目指すことが今後の課題である。そのためには、子ども同士、また教師と子どもの対話的關係が不可欠である。

5, 引用・参考文献

- 多田孝志.(2006).対話力を育てる.教育出版.
- 多田孝志.(2012).授業でつくる対話力.教育出版.
- 鶴田清司・河野順子.(2012).国語科における対話型学びの授業をつくる.明治図書.
- 長谷浩也.(2013).対話が子どもの学びを変える指導のアイデア&授業プラン.明治図書.
- 村松賢一.(2011).対話能力を育む聞くこと・話すことの学習.明治図書.